

カルーアミルク

(今年は何にしよう……)

洗濯機が止まるまでの間、半ばバラエティと化したニュース番組を見ながら考える。

『今年のおすすめはこちらです!』

長い髪を可愛らしくカールした女の子が持っていたのは、真っ赤なハート型のチョコレートだった。光沢のあるそれは、光を反射してきらきらと輝いている。

『わぁ! これは素敵ですね! 見るからに本命って分かりますし!』

中継を見ていたスタジオの女性キャスターが笑顔で続ける。

『こちら、どうですか! いただいたら嬉しいですか?』

話を振られた年配の男性キャスターは苦笑いをして――。

(はぁ……参考にならない……)

リモコンを手に取りテレビを消した。篠崎が仕事今の今、リビングはしんと静まり返っている。

(女の子だったらなあ……)

あんな華やかなものでも、きつと購入することができただろう。でも安西は立派な男だ。

篠崎はよく可愛いと言ってくれるけれど、それは別に女の子らしいという意味ではない。

(うーん……あと三日しかない……)

バレンタインデーはもうすぐそこまで迫っている。

そもそも篠崎は甘いものを自ら食べるタイプではないし、日本出身でもないのだから日本らしいチョコレートというこだわりは捨ててもいいのかもしれない。

でも、やはり安西にとってはバレンタインデー＝チョコレートだ。それを好きな人にあげたい。いつもはなかなか恥ずかしくて好きだの愛してるだのと言うことはできないから、こんなときくらい、篠崎の言葉に同調するような形ではなく、安西の気持ちとして、安西の方から愛情と日頃の感謝を伝えたかった。

(でもなあ……)

お店に買いに行くのはハードルが高い。最近では男からも渡すことがあると聞くし、男同士の友チョコといわれるものの存在だって知っている。

でもそれを自分に置き換えると難しかった。

携帯を手に取りネットを開く。

【バレンタイン 男から】

検索を押せばたっくさんのサイトが表示された。やはりジェンダーレスというか、女性からという文化にこだわらない傾向になってきているということだろう。

しかし、男性から男性へというのを見つけることはできなかった。
(やっぱり女性向けのプレゼントかあ……)

篠崎が好きな時計とか妖怪グッズならそれなりに買うことはできるけれど、チョコレートと思うと難しい。

(でも……)

うーん、うーんと唸っていると、背後から声を掛けられた。

「どうした、具合でも悪いのか」

「あ……いえ、コーヒーですか？」

時計を見ると、時刻はすでに十時を回っていた。洗濯機を回し始めたのは確か九時前だったから、もうとつくに止まっていただろう。濡れたまま放置してしまったことに気付き顔をしかめる。

「諒？」

「あ、いえ……コーヒーは——」

「自分でするよ。諒は横になっていなさい」

「あ、いえ、元気です」

まさか篠崎へのプレゼントに悩んで唸っていましたなんてことは言えない。

笑顔を作り、キッチンに立つ。

「ダメだよ。無理はいけない」

(あつ……)

背後から抱きしめられると、つい甘えたくなってしまふ。篠崎へのバレンタインの贈り物が……なんて言っつて、考えていたこと自体を褒めてほしくなってしまう。それで「嬉しいよ」と言っつて——。

「大丈夫です。夕飯どうしようかなって悩んでいただけなんです」

「唸つてたぞ」

篠崎が少しだけ笑った。

「毎日作っていると唸りたくなるほど悩む日もあるんですよ」

言っつてから、しまったと思っつた。

「あ、えつと——」

「そうだな、いつも任せきりですまない。昼はデリバリーで、夜はどこかに食べに行こうか」遅かった。また気を遣わせてしまった。嘘なんて吐いたばかりに。

「あ、いえ、もう材料はあるんです」

言いながら、支離滅裂だなど自分でも思っつた。

そして、篠崎がそれに気が付かないはずがなかった。

「——隠し事かな？」

~~~~~

キス・イン・ザ・ダーク

「明日は一日予定を空けておいてほしい」

明日はバレンタインデー。前は気にしていなかったけれど、もうちゃんと、覚えた。

「はい」

頷いて、マグカップに手を伸ばす。

「ほら」

「あ……すみません」

中は少量の砂糖が入ったホットミルク。注ぐのが得意ではない輝のために三崎が作ってくれたものだ。

手に触れさせてもらった持ち手を持って、一口。

(おいし……)

「今日の予定は？」

「仕事だけです……何かありましたか」

明日は元々休みの曜日だったのでいいけれど、今日の予定を訊かれるとはどうしたのだろう。

「いや、仕事だけならいいんだ。迎えに行くから、一緒にスーパーに寄って帰ろう」

「え、でも隆司さん仕事は？ 僕買ってきますよ」

ここに来るまでは一人暮らしだったのだ。確かに店員さんには迷惑をかけてしまうけれど、買いた物ができないわけではない。

「いや、一緒に選びたいんだ」

「そうなんですか？」

いったい何の買物だろう。輝の衣類を買うなら分かるけれど、スーパーで一緒に選ぶというのはよく分からない。

「何を買うんですか？」

まさかチョコレートを作るのだろうか。生チョコは簡単に作れるとラジオで言っていたけれど、輝には作れる気がしなかった。

(隆司さんと一緒なら作れるかな)

三崎は器用だと思う。と言っても、三崎が切ってくれた野菜がどのような形になっているのかは見たことがないので、想像で、だけれど。

「イチゴとバナナ……それからマシュマロとか」

「イチゴとバナナとマシュマロ、ですか」

いったい何をするのだろう。それに、一人でも買えるものばかりだ。重いものでもかさ張るものでもない。

「あの、それなら僕買ってきますけど……」

「いいんだ。何を買うか、二人で決めたい」

「——分かりました」

本当は、全く理解できていなかった。でも三崎がそう言うのだから、頷いておくしかない。

「近くで待っているから、終わったら電話がほしい」

「分かりました。遅くならないようにしますね」

「かまわないよ。のんびり待ってる」

「ありがとうございます」

滑り込みで入ってくる患者さんが来ないといいな、と思いながら食事を進めた。

く  
く  
く

はあ、と息を吐いて天井を見上げる。  
体が重い。それに陰部がヒリヒリと痛んでいる。

今日最後のお客さんはとても激しい人だった。事前のミルキングによって出すものは何もないというのに二回イキ、それから出るはずがないと思っていた潮まで吹いてしまった。

「千尋、少し待っててくれる？ タオル取ってくる」

「はい。すみません……」

お昼の時間。みんなは昼休憩に入るけれど、四肢のない千尋だけは退勤の時間だ。本当ならお疲れ様と言って抱き上げ、控室に連れて行ってくれるはずの諏訪の背中を見送る。

(迷惑かけちゃった……)

潮を吹いていると気付いたのは「たくさん出るね」というお客さんの声が聞こえたときだ。続いて諏訪の「お客様、お召し物が」という慌てた声が聞こえ、異常を察した。幸い体液で濡れることを好むお客さんだったようでトラブルにはならなかったけれど、辺り一面びしょびしょにしまったのだ。

(はあ……)

きつと帰宅したらたくさん責められるだろう。「ちーくん、透明なおしっこたくさんお漏らししちゃったね」と言っつて、シャワーの前に濡れたところを全て舐めとられてしまう。それでまたたくさん感じて、でもなかなかイかせてはもらえない。もしかしたら諏訪が射精するときまで、一度も亀頭をいじってもらえない可能性だってある。

(ううう……)

仕事中にいじられ過ぎた亀頭は痛むのに、諏訪にいじってもらえないかもしれないと思うときゆうんとなってしまう。会陰に移された尿道はひくひくし、そんなのは嫌だと訴え始める。

「はあ……」

体から力を抜いて、真つ白な天井を見上げる。

(でもお潮吹いちゃった僕が悪いんだし……)

それに怒られるわけじゃない。仕事中の様子を理由にしていじめられるだけなのだ。いじめられる——いじめてもらえる。

(早く帰りたいな)

諏訪はまだかな、と思っていると声が聞こえた。

「千尋くん」

「あっ！」

諏訪ではない声に頭を上げると、そこにいたのは支配人の藤永だった。

「支配人。お疲れ様です」

「たくさんお潮を吹いたんですね」

「あつ……すみません、汚してしまって」  
「いえ、いいんですよ。お客様も上機嫌でいらっしやいました」  
「そうですか」

諏訪は大丈夫だと言ってくれたし、聞こえてきたお客さんの声も嬉しそうだったけれど、偉い人にそう言ってもらえるとほっとする。

「千尋くん、もうすぐバレンタインですが、何か考えていらっしやいますか」

「あ……えつと……」

来週にはバレンタイン、ということとは分かっていたけれど、手も足もない千尋には何も用意することができない。でも気持ちは伝えたいし——それなら、体で、と言うしかないかなと思っていたところだった。銀行口座は諏訪に管理してもらっているの、そこから好きなものを買ってほしいということもできるけれどそれでは味気ないし、そんなもので諏訪が悦んでくれるとも思えなかった。

「もしよかったら、何か手伝うからと夕が」

~~~~~

カルーアミルク (全年齢)
キス・イン・ザ・ダーク (R-18)
人体改造博物館 (R-18) の三本です。

3万4千文字で、エロは濃くありません。
よろしく願いいたします！

バレンタイン短編集2021 サンプル

gooneone (ごーわんわん)

2021/ 2/ 22

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

